

「類聚法令 五」(東京大学法学部法制史資料室蔵)

首都大学東京日本近世史ゼミ

凡例

- 一 「類聚法令 五(内題は「類聚法令六上・同下」のうち、表紙を除く全文を原本の体裁に即して掲載した。本来は記されていないが、各項目別に史料番号を付けた。
- 一 読点(、)や並列点(・)については適宜加えた。
- 一 翻刻内の傍注は、文字に関するものは「」内に、人名等の考証は()内に記した。
- 一 字体は原則として常用漢字及び通用文字を用いたが、必要な場合は原体を生かした。
- 一 明らかな写し間違いと見られる文字については修正を加えた。但し、不確定の場合は「○カ」と付した。
- 一 欠損または判読不能で、その字数が確定できる場合は□、その字数が推測となる場合は、推測される字数に則して「□」で示した。
- 一 脱字の場合は「○脱」と付し、推定によるものは「○脱カ」とした。
- 一 原文のままでは理解しがたい部分には(ママ)を付した。
- 一 本史料紹介は、首都大学東京「日本史学演習」、首都大学東京大学院「中近世史研究演習第二」(二〇一一、二〇一二・二〇一四年度)の参加者による授業の成果に基づく。今回の翻刻作業は、同大学院生土屋健俊・須藤宏美が行い、それを総括する形で同授業の担当教員である谷口央が責任編集した。

類聚法令六^上 目録

金銀通用・吹替・引替・切^レ金・疵金等之 公儀御書付写数通、

「No.1」 乾字金通用

覚 美濃堅紙

乾字金引替之儀触書^ニて出候通、来^ル寅十二月迄^ニ限之候、然処通用も寅年迄と心得違候者も有之様^ニ相聞候、先達^而相触候通、通用ハ弥当亥十二月迄を限候間、其旨急度相心得可申候、以上、

亥七月

今度從

公儀如斯御書付相渡候間写遣候、町郷中相触、急度相守可申也、

亥七月十日

(須知) 彦之丞役印
(朱雀) 頼母 役印

享保四也

伊藤又五郎

加藤甚右衛門

岡宗大夫

橋爪源左衛門

川北清右衛門

奥田清十郎

河村新之丞

牧戸六郎兵衛

来田助左衛門

間宮善左衛門

木下五郎左衛門

井面藤右衛門

大久保惣兵衛

〔No. 2〕銀通用

覚

元禄銀・宝永銀・中銀・三宝銀・四宝銀通用之事ハ来丑年限リ、翌寅年^子方世上通用一切停止たるへく候、右五品之銀、新銀を引替候儀ハ最前相触候通、弥来^ル寅年を限可申候、

右可存此旨候、已上、

子三月

△右 公儀御書付写遣、一通^リ添書して町郷中へ相触、享保五^子三月廿八日也、

〔No. 3〕乾之字金通用停止

口上之覚

去々年從 公儀御触を以申渡候通、当子年^子方弥乾之字金通用仕間敷候、尤乾之字金何両何分与申名目となへ申間敷候^{（唱）}也、

右之通未々迄弥堅可申渡候、以上、

享保五^子四月四日 彦之丞

頼母

町年寄

大庄屋

〔No. 4〕乾字金^并銀通用停止御書付

覚

一乾字金通用之儀、去々亥歳限^ニ而去子年以来者一切通用無之筭候處、今以通用候筋茂有之由相聞候、遠国末々之者心得違候故右之通候歟、此上堅通用不仕急度引替可申候、尤引替之儀も来寅年限之事^ニ候条、是又其旨を存、無由断引替可申候事、

一元禄銀・宝永銀・中銀・三ツ宝・四宝銀之事茂弥最前被 仰出候通、来寅年限引替可申候、卯年々者一切通用停止之義候条、是以遠国末々迄其旨相心得、来寅極月を限、急度引替可申候事、
右之趣江戸・京・大坂其外所々町場者其所之奉行、国々在々御料者御代官、私領ハ領主・地頭より入念可被申付候、若此上書面之趣違犯之事有之おゐてハ可為曲事者也、

丑四月

△右一通^リ添書して写、町郷中^江、享保六 四月十七日触之、

〔No.5〕慶長金・新金・切^レ輕目通用御触

慶長金^并新金共^ニ小判之内三分迄之切^レ有之金目三厘迄輕^キ分、壹分判も疵有之金目少々輕^ク候共、無滯通用可致旨去^ル丑年相触候處、通用滯候由相聞候、依之自今切^レ疵大小^ニ無構致通用、金目之儀者只今迄之通三厘以上輕^キ分者直^シ金^ニ仕通し、諸国在々御領・私領共^ニ右之段相心得、諸商売物代金・為替金等無滯取引仕へし、若滯所々有之候ハ、可訴出、急度越度^ニ可申付候、以上、

卯三月

△右写遣添書して町郷中^{（白井）}相触、

八右衛門

享保八^卯三月十六日

彦之丞

〔No. 6〕大判之儀御書付

覚

一大判之儀元禄年中吹直有之、古来之大判より位劣候^ニ付而、此度右吹直以前之大判之位^ニ吹改被^レ仰付之、当十一月より兩替屋共^ハ相渡候間、献上^并被下物、其外之通用にハ当十二月朔日より可用之候事、

但^レ壹枚ハ金七兩貳分^ノ之積^リたるへく候、兩替之者共買入候節右分量不相減様にいたし、売出候時分も歩銀多取へからず候、此旨於令違犯ハ僉儀之上可為曲事候事、

一只今迄通用候元禄大判ハ、当十二月朔日^{光富}より一切通用停止之事、

一元禄大判ハ当十二月より潰金に成候条、所持之面々ハ後藤庄三郎方^{光富}へ差越之、潰金之割合を以小判と可引替候、尤貯置へからざる事、

但^レ潰金之分ハ壹枚^ニ付小判四兩貳分余之積たるへき事、

右之趣国々所々に至迄急度可相守者也、

巳十月

右写遣添触^ニ町郷中へ申付^ル、

享保十^日十月十七日也、

〔No. 7〕疵金・輕目金通用

疵金・輕目金通用之儀、去^ル丑年・卯年兩度相触候處、今以通用相滯候由相聞候、自今弥無滯取引可致旨、諸国兩替屋共^ハも此旨支配^ノ急度申渡、若又武家方^并町方・百姓等不受取者も在之者兩替屋方^ハ其支配^ノ申出候筈^ニ申付候間、武士方・町方・百姓末々迄無滯可致通用候、若此已後彼は申致難渋歩銀等取候兩替屋在之者、其所之支配^ハ早速可訴出候、吟味之上、急度可申付候、

右之趣江戸・京・大坂ハ勿論、其外御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭方急度可被申付候、以上、

九月

兩替屋^ハ申渡

疵金・輕目金通用之儀^{去ル}丑年・卯年兩度相触候處、今以通用相滯候由相聞候、自今弥無滯可致取引旨、諸国兩替屋共^ハも此旨支配^〳方急度申渡候、若又武家方^并町方・百姓等不受取者も在之^ハ、兩替屋方^方其支配^〳申出候筈^ニ申付候間、武士方・町方・百姓末々迄無滯可致通用候、若此已後彼是申致難渋歩銀等取候兩替屋在之者、其所之支配^ハ早速可訴出候、吟味之上急度可申付候、

右之通京・大坂ハ不及申、諸国一統武家・町^{方脱力}・百姓等迄相触候間、当地之兩替屋ハ不及申、諸国之兩替屋共迄此旨相守可致通用候、若難受取旨申族於在之^ハ、早速其所之支配^江訴出可申候、吟味之上急度可申付候、依之尚又此度相触候間可得其意候、已上、

九月

今度從 公儀如斯御書付相渡候間写遣候、町郷中^{山中}も相触、急度可相守也、

午九月廿四日

兵介^{山中}
助之進^{横山} 兩役印

町一通

郷一通

〔No. 8〕 乾字金通用御書付

覚

一乾字金之儀去寅年限通用相止、其已後者潰金之積を以金座〔買取候得共、今以殘員數茂多^ク候、依之向後ハ潰金^ニ不仕其儘通用可仕候、

但新金^并慶長金壹両之代^ニ乾字金貳両可相用、尤乾字金壹両ハ新金・慶長金貳分^ニ之積たるへき事、

一御年貢・諸運上を始 公儀〔納候類^并合力或奉公人給金、且又諸商売物代金等其外金子^ニ而取やり候儀、右之積を以通用可仕事、

右之通可相心得者也、

戌正月

右写遣一通^リ添書して町郷中へ、享保十五戌正月廿九日相触、

兵介
(玉置)
佐右衛門

〔No.9〕金子通用之儀^ニ付 公儀方御書付

慶長金・新金共切疵之分大小^ニ無構致通用、金目之儀小判ハ三厘迄輕^キ分^并壹分判も少々輕^ク候とも無構通用いたし、三厘以上輕^キ分ハ後藤方^(光富)遣し、直し金^ニ可致旨先達^而段々相触、就中去^ル午年相触、上納金にも疵金無差支包候處、頃日ハ別^而少しの疵も通用相滞候由相聞^へ候、自今弥以慶長金・新金・乾字金小判・壹分判共^ニ切^レ疵へげ疵大小に無構、切^レはなれ候迄可致通用候、且又小判金目之儀三厘迄輕^キ分ハ無滞致通用候様^ニ先年相触候得共、自今小判之儀慶長金・新金ハ金目四厘迄輕^キ分通用いたし、乾字金之儀金目輕^キ分も慶長金・新金之輕目分量之割合を以無滞可致通用候、壹分判之儀ひゞれ疵を折疵と名付、直し金を継金と名付不通用^ニ候由、自今ハ是等之分も無構致通用、尤金目之儀ハ式厘迄輕^キ分ハ無滞可致通用候、此旨諸国在々御領・私領共^ニ右之段相心得兩替屋を始諸商売物代金・為替金等無滞可致通用候、若又武家方^并町方・百姓等不請取もの有之ハ、兩替屋方其支配^ノ可申出候、此已後彼是申難渋いたし歩銀等取候兩替屋有之者、其所之支配^へ早速可訴候、吟味之上急度可申付事、

右之趣江戸・京・大坂者勿論、其外御領ハ御代官、私領ハ領主・地頭より急度可申付候、已上、

十一月

△右一通リ之添触して町郷中^{（六兵衛）}写相渡、

加藤

卯十二月十二日

玉キ 役印

町老二人

大庄や九人

〔No.10〕金銀吹替

覚

一世上金銀不足^ニ而通用不自由之由相聞候付而、此度金銀共被吹改候事、

一此度吹改候金銀相渡候儀、慶長金・新金ハ百兩之代^ニ百兩、乾字金ハ二百兩之代^ニ百兩、慶長銀・新銀者十貫目之代^リニ十貫目引替可相渡候間、右引替之格を以書面之金銀無差別取交、請取方・渡方兩替共^ニ無滯通用可致候、尤上

納金銀も可為同前事、

一吹改候金銀、金座・銀座方増歩差出可引替候、員数之儀ハ引替金百兩^ニ付、増歩金六十五兩ツ、引替、銀十貫目^ニ付増歩銀五貫匁ツ、可相渡候事、

一引替候金銀、町人方引替候筈^ニ候条、武家・其外共^ニ勝手次第、町人^江相對^ニ而申付可引替候事、

一引替^ニ可指出金銀之儀、員数相知候事^ニ候間、貯置不申段々吹替可申候、若貯置不引替者相知^レ候ハ、吟味之上急度可申付事、

附、右引替不出銀者、只今迄之通潰銀之積^リ可相心得候、

右之条々国々所々^ニ而此旨可存者也、

元文元辰五月

一此度金銀引替之儀、来月十五日ヨリ金銀座^ニ而引か^{〔替〕}候間、可得其意候、

一右引かへ之儀、為替兩替之者共取集、金銀座^江差出引替候間、右之もの共方へ申付、金銀引かへ可申候、

一右為替之者共金銀引かへ之節、為諸入用金兩^{〔老脱力〕}付銀壹分宛、銀百目^ニ付銀壹分五厘充之積^ヲ以、金銀高^ニ応し金銀主方^ヲ請取候筈^ニ候、若右之高^ヲ多請取候か、又者無謂引かへ為滞候ハ、勝手次第外町人又ハ直^ニ成共金銀座^江差出引かへ可申候、

但金者百兩、銀者十貫目以上可致持参候、為替之者方^ニ而引替させ候員数ハ勝手次第たるへき事、

金銀取集ハ右為替之者、

駿河町

泉や三右衛門

本兩替町

中川清三郎

同所

海保半兵衛

同所

谷勘左衛門

本町二丁目

富山与三兵衛

同所四丁目

竹川彦左衛門

長谷川町

荒木伊右衛門

駿河町

三井次郎右衛門

三井三之介

三井元之介

以上、

辰五月

今度金銀吹替之儀従

公儀御書付出候付写遣候、町中末々迄可令触知也、

辰五月十九日

六兵衛 役印

佐右衛門 同

伊藤又五郎

加藤甚右衛門

右同文言^ニ而郷中へも相触、

〔No.11〕新銀引替之儀従 公儀御書付

此度銀吹方之儀、引替高^ニ心^シ無滯吹立、引替候筈^ニ候、随分無油断引替可申候、新銀・古銀割合之儀暫之内^ニ候由、先達而相触候通^ニ候間、随分精出^シ引替可申候、割合相止候節^ニ至忝度^ニ申込候而者、急^ニ吹出来不申諸人難儀可致候間、此節方日々精出し、京・大坂へ国々方あつまり候古銀、於京都引替所引替可申事、

辰八月

右之趣京・大坂^ニ而相触候間被得其意、於当地も相心得候様^ニ可被相触候、

△一通^リ添触^ル写町郷中へ渡^ス、

元文元辰八月廿八日申渡、

〔No.12〕金銀通用之儀

先達^而相触候通、御年貢・小物成・諸運上物・諸色納物等之納金銀、此度吹改候文字金銀^ニ而も古金銀^ニ而も割合之無差別、金壹兩^ハいづれの金^ニ而も壹兩、銀壹貫目^ハいづれの銀^ニ而も壹貫目之積^リ、其納高^ニ応し可相納候、右ハ相知候事^ニ候得共、末々百姓共とくと吞込不申ものも可有之と猶又相触候間、末々百姓共迄よく／＼吞込心得違無之様可仕候、尤村々^ハ早々相廻し最寄之私領・寺社領村々^ハも可申聞候、

辰九月

先達^而道中宿々^ニ而此度吹改候文字金銀通用無滯ため、見せ金差添通用可致旨相触候処、今以文字金銀しかと通用不致由相聞不埒候、此已後無滯通用可致候折々ハ、人をも相廻し通用滯候哉承届、其品^ニより急度可申付候、

右之通東海道・中山道・日光道中・甲州道中^ニ私領有之面々^ハ可被相触候、御料ハ御代官より相触候間、可得其意候、

九月

△右^ニ通写遣一通^リのそ^ハふれ^シ^{「添触」}而町郷中^ハ、元文元辰九月十七日申渡、

〔No.13〕新金銀通用引替等之儀従 公儀御書付

此度金銀吹改候付、諸色之直段文字金銀^ニ而可相立处、右文字金銀其節ハ吹出来不申候^ニ付、諸色代物暫^ニ三ヶ月之内割合を以取遣り可仕由申渡候、此節ハ段々金銀吹出来、世上^ハ出候^ニ付割合遣之義可相止处、急^ニ行当^リ候者も可有之候之間、先此度ハ割合遣ひ相止候義者不申渡候、来年^ニ至^リ候而割合遣ひ可相止候間、其心得^ニ而此節より随分古金銀文字金銀^ニ可引替事、

一在方^ニ而者、今以古金銀專^ニ相用候之由不埒^ニ候、前条之通随分引替文字金銀專可相用事、一銀之儀遠国^ニ而者猶以古銀を用、文字銀通用不致候由、依之銀引替別^而少^ク不埒之至^ニ候、来年ハ割合遣ひ相止候儀も可申渡候^ニ付、其節ハ可行当候、尤只今迄之通銀引替高少^ク候ハ、来年^ハ銀百貫目^ニ付増歩銀五拾貫目相渡候内

を減候様ニ可申渡候間、此節方随分精出引替可申事、

一年貢・合力・給金・借金・買懸り・地代・店賃・質物・田地質等、弥以無割合古金銀文字金銀同様ニ取遣り可仕事、

右之条々国々所々ニ此旨を可存候、

右之趣可被触候、御料者御代官、私領ハ地頭方相触候様ニ可被達候、

辰十一月

△右御触写相渡、御書付之趣可相守旨添触して、元文元十一月廿九日町郷中へ申渡、玉キ・加藤時代

〔No.14〕新金銀引替等之儀従 公儀御書付

文字金銀出来方少候故、当分割合ニ而通用候へ共、段々文字金銀出来候ニ付、金銀共ニ割合ニ而通用候儀、当年中を限、

来午正月方割合通用相止、先達而相触候通慶長金・新金ハ百両之代り文字金百両、乾字金式百両之代り文字金百両、

慶長銀・新銀ハ拾貫目之代り文字銀拾貫目之積り、請取方・渡方・両替共ニ通用可致候、午正月より割合遣仕候もの

於有之ハ急度可申付事、

一金銀引替ニ付増歩之儀、当十二月迄ハ只今迄之通相渡、来午正月より引替金百両ニ付増歩三十両引替、銀十貫匁ニ付

増歩式貫目ツ、可相渡候間、此節より随分精出し金銀ともに引替可申込事、

右条々国々所々ニ此旨可存候、

巳三月

△右写遣添触ニこの趣可相守、元文二巳三月廿七日、町郷方へ相触畢、

〔No.15〕金銀通用之儀

文字金銀段々出来引替致通用候得共、遠国へはいまた不行渡所も有之様ニ相聞、引替薄く候、且又来午正月よりハ割合

遣ひ相止増歩相減可相渡段者先達^而相触候通^ニ候間、弥其通^ニ可相心得候、就夫当冬^ニ至^リ急引替多く申込候而ハ金高出来方差支、引替相渡候義手間取可致難儀候条、此節より引替無滞様^ニ領内家中^并町方・在方^ハ可被申渡候、国々より引替候金銀、江戸・京・大坂^ハ差越候義、思々^ニ而者手廻し成兼候所も可有之候間、領主^ノ急度致世話引替させ、無滞行渡^リ候之様^ニ可被致候、

巳七月

右之通向々^ハ可被相触候、

文金銀引替之儀^ニ付今度從公儀御書付相渡候間、写一通遣之候、御書付之表奉得其意、金銀引替申度者共ハ、目錄を以員数可申出候、其上^ニ而金銀差出候ハ、勘定所^ノ致世話引替可相渡候間、右之旨末々迄急度申渡、組限^ニ可申出也、

巳七月廿七日 両役印

元文^ニ也

町年寄共一通

大庄や共一通

〔No.16〕金銀引替日延之儀

文字金銀割合遣当年中を限、来午正月より割合遣相止^{メ并}増歩相減候義先達^而申渡候処、諸事請払極月晦日を限取引致、右請取候古金銀正月^ノ割合を相止、増歩減候而者致難儀候由、江戸・京・大坂諸問屋共願候^ニ付、来午四月迄割合候而可致通用候、金銀ともに来午四月迄引替案内申込候分ハ、四月已後引替金銀相渡候共只今迄之増歩相渡、五月朔日より已後引替案内申込候分ハ、先達而申渡候通増歩可相減候、

巳八月

右之趣可被相触候、

国々方出候灰吹銀・銅^ヲしほり出候銀^并銀道具・潰銀等、前々方銀座^{〔獵〕}持来買入候処、近年世上^ニ而^ニみたりに売買いたし^ニ質物入、或買込置候義茂有之由相聞候、向後無滞銀座へ売渡可申候、銀座方も改申出候様^ニ申渡候間、隱置追而相知候ハ、急度可申付候、

巳八月

右ノ趣可被相触候、

△右ニ通写遣町郷中へ添触^ニて申達^ス、

元文二巳九月四日

〔No. 17〕新金銀引替之儀

文字金銀引替之儀、国々より江戸・京・大坂へ差越候儀、思々^ニ而^ニ者手廻し成兼候所も可有之候間、領主^ノより急度致世話、引替させ候様^ニ先達而相触候処、今以遠国末々之ものへ不行届、来四月已後ハ割合遣ひ相止、引替増歩も減候義不存もの有之、引替怠^リ候由相聞候之間、此節より精出し可引替旨、御料ハ御代官、私領ハ地頭より遠国末々迄とくと相心得候様^ニ急度可申触候、

右之通可被相触候、

巳壬十一月

文字金銀引替之儀、又々從公儀御書付相渡候間、写毫通遣之候、御書付之趣奉得其意、先達而相触置候通、引替申度者共有之候ハ、可申出候、其上^ニ而^ニ金銀差出候ハ、致世話引替可遣候条、右之旨末々迄急度申渡、組限^ニ可申出也、

已十二月十一日 兩役印

右町郷中へ一通ツ、うつし遣ス、元文二也

〔No. 18〕 同御書付

文字金銀引替之儀、国々方江戸・京・大坂、差越候義、思々ニ而者手廻し成兼候所も可有之候間、領主ノより急度致世話引替させ候様ニ先達而相触候處、今以遠国末々之ものへ不行届、来四月已後ハ割合遣ひ相止、引替増歩も減候儀不存者有之、引かへ怠り候由相聞ヘ候間、此節方精出シ可引替旨、御料ハ御代官、私領ハ地頭方遠国末々迄とくと相心得候様、急度可申触候、右之通可被相触候、

已壬十一月

文金銀引替之儀ニ付又々從

公儀御書付相渡候間、写老通遣之候、御書付之趣奉得其意、先達而相触置候通引替申度者共有之候ハ、可申出候、其上ニ而金銀差出候ハ、致世話引替可遣候条、右之旨末々迄急度申渡、組限ニ可申出也、

已十二月十一日 兩役印

町郷中へ一通ツ、
元文二歲

〔No. 19〕 金銀引替之儀從 公儀御書付

文字金銀割合遣相止并増歩減之儀、当四月限之積り、尤四月迄引替案内申込候分ハ、四月以後引替金銀相渡候共、只今迄之増歩相渡、五月朔日已後引替案内申込候分ハ増歩相減候積り、先達而相触候通弥其旨相心得、古金銀不貯置、此

節早々可引替候、

右之通御料ハ御代官、私領ハ地頭より可被申触候、以上、

午二月 元文三也

△右写遣添ふれして町郷中へ申渡、

三月九日

〔No.20〕古銀新銀ニ引替之儀ニ付從 公儀御書付

当五月朔日ハ銀引替之儀、銀座ニ而も古銀請取、文字銀ニ引替候様申渡候間、江戸・京・大坂銀座へ古銀持参引替可申候、且又銀座へ手寄無之ものハ所々問屋・両替屋相頼、銀座へ為差出引替、入用銀ハ百目ニ付銀壹分五ツ、只今迄引替所ニ而請取来候を、当五月朔日ハ、右引替古銀取集差出候取次之ものへ可相渡候間、問屋・両替屋共古銀取集、銀座へ差出引替候様ニ可致事、
右之趣可相触者也、

午四月

△右添触如毎町郷中へ、元文三年五月八日渡ス、

〔No.21〕金銀通用之儀

古金銀を以割合通用、当五月朔日より停止之旨相触候處、今以遠国者勿論、江戸・京・大坂ニ而も割合遣致候者有之由相聞候、向後古金銀割合通用堅致間敷候、尤古金壹両ハ文字金壹両、古銀百目ハ文字銀百目ニ而可致通用候、若此以後古金銀を以割合通用致候者有之者、吟味之上急度可申付事、
右之通御料・私領共滞無之様可被相触候、以上、

午八月

金銀割合通用堅致間敷候段、領主へ茂急度不洩様ニ可被申付候、末々へ通達薄様ニ相聞候付、此段も申達候、
△右写遣添触如例、 佐右衛門 六兵衛

元文三年午八月廿二日 町郷中へ申渡、

〔No.22〕金銀引替之儀從 公儀御書付

文字金銀段々引替相濟候付、向後引替所相止、来_未正月より金ハ江戸・京金座ニ直ニ引替、銀ハ江戸・京・大坂銀座ニ直ニ引替候筈ニ候間、勝手次第ニ引替候様ニ可致候、只今迄引替所ニ引替候入用として、金老兩ニ付銀老分、銀百匁ニ付銀老分五匁宛請取候へ共、自今ハ右入用不請取筈ニ候間、金銀座へ持参候ハ、右入用差出候ニ不及候、尤国々ニ引替致世話候者ハ引替人へ相對いたし、右入用取候ハ、古金銀取次、金銀座へ差出候様可致候、

一先達_而相触候通、当四月晦日迄引替所へ案内申込置候分者、向後共ニ金ハ六割半、銀五割之増歩ヲ以金銀座ニ引替候筈候、且又右案内申込置候金銀高之内、先達_而金銀不在合段断申聞帳面除キ候分茂、此已後金銀持参候ハ、四月晦日迄申込帳面ニ記置候、員数程者金ハ六割半、銀ハ五割之積_リ増歩相渡、金銀座ニ引替候様申渡候間、其旨可相心得候、

右之通可被相触候、

午十一月

右添触して写町郷中へ申渡、

元文三年十二月十日 兩人

伊藤 加藤 岡

右一通

大庄や十人

右一通

〔No.23〕金銀引替之儀従 公儀御書付

先達^而相触候通、来未正月^方金者江戸・京金座、銀ハ江戸・京・大坂銀座^ニ可引替候、当四月晦日迄案内申込引替日限^ニ成金銀不有合由断之分も、此以後申込候ハ、金ハ六割半、銀ハ五割之増歩可相渡候、且又文字金段々出来^ニ付、来未三月晦日日限引替相止候間、此節^方精出可引替候、

午十二月

△右添触して写遣^ス、元文四^未四月四日也、

〔No.24〕古金銀通用引替之儀従 公儀御書付出町郷中^{江触}

金銀吹替以後古金銀未世上^ニ相残^リ有之様^ニ相聞候間、元文元辰年定之通、古金ハ六割半、古銀ハ五割増之積^リを以、古金銀取交通用可致事、

但古金銀と有之者、慶長金銀^并正徳年中^方吹改去午年迄通用いたし候金銀之事^ニ候、

一御年貢・諸運上を始 公儀^へ納候類^并合力或ハ奉公人給金・諸商売物代等其外金銀^ニ而取やり候儀、只今迄之通^リ文字金銀通用居置、古金銀ハ右割合を以通用可致事、

一古金銀引替おくれ候歟、又右之古金銀引替申度者ハ、金銀座^へ出^シ勝手次第引替可申候、尤古金ハ六割半、古銀ハ五割増之積^リを以引替候筈^ニ候事、

右之通可相心得候、且辰年吹替以来又候金銀吹替可在之抔と取沙汰在之由相聞候、此以後決而其儀無之事^ニ候、世

間金銀手広く通用之ために候条、末々之者心得違無之様よく可申聞候、以上、
右之通可被相触候、

子六月

△右一通り添ふれして写、延享元年六月廿七日町郷中へ相渡、

(長田) 三郎兵衛
(柳田) 猪之介 役印

宛所如例

〔No.25〕切_レ金・疵金通用之儀 公儀御書付

比日切_レ金・疵金等通用不自由ニ相成候之由、畢竟諸国在々諸商人共切・疵金嫌ひ、国々為替金等ニ茂疵金等撰候故之事ニ相聞候、前々も被 仰出候通、自今小判・壹歩判共切_レ疵・へけ疵大小無構切はなれ候迄可致通用候、輕目金之儀ハ小判ハ四厘迄輕分致通用、壹歩判茂右分量を以輕分・疵金共無滞可致通用候、此旨諸国在々御料・私領共_ニ右之段相心得、両替屋を始、諸商売物代金・為替金等無滞可致通用候、若又武家方・町方・百姓等不請取者有之其_{兩替屋}より其支配へ可申付候、此已後彼是申致難渋、万一步銀等取候両替屋有之者、其所之支配へ早速可訴出候、吟味之上急度可申付事、

右之趣、江戸・京・大坂者勿論、其外御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭方急度可申付候、已上、

丑閏十二月

△右一通り添触ノ写遣、町郷中へ一通ツ、

(稲葉) 伝兵衛

延享三年正月六日

三郎兵衛 時代

一 寛延^二_巳十二月^并寛延^三_午五月、右同様ノ義^二付御書付出各後編^三記之、

類聚法令六_下 目錄

三笠博奕

廻船荷物改方

諸秤千木

用水井路郡境山野之儀

地神經読盲目官位院号けさ衣

金銀出入御取上

書物之儀二通

取退無尽

古分銅

部屋子覆面頭巾

道中_并船積御書付

浦賀御番所

鉞御停止

諸秤改

仏神新規之儀御法度

利足減少

同出入之儀

御代官_{所カ}下加勢

寺社勸化

分銅改

御巡見_二付御書付

吉田家_方申来候書付

永代橋_并船中博奕

梨子地蒔絵御停止

菱御紋停止

人給引下_ケ

百姓勘定帳面印判

絞_リ油

潰銀_并櫛筭

御巡見_二付御書付

吉田家_方申来候書付

〔No. 26〕公儀_方相渡候三笠博奕御停止御書付

三笠博奕御停止之處、此節武士屋敷_并寺社_二而も、右博奕いたす由風聞有之、左様之儀別_而仕間敷事_二候、只今迄町方

計相改候へ共、向後武士屋敷・寺社_二至迄改、若右躰之儀も候ハ、急度可被遂御僉儀旨被 仰出候条、其旨被相心得、

常々堅可被申付候、右之趣可被相触候、以上、

亥七月 享侯四也

右_二添触_ル

此度從 公儀三等博奕御禁制之御書付、於江戸相渡候付、御国末々迄堅可申付旨被 仰出候間、町中末々迄相守候様ニ急度可申渡也、

彦之丞役印
亥八月十三日
頼母 役印

△郷中、も右同文言、

伊藤又五郎 加藤甚右衛門 岡宗大夫

〔No. 27〕 浦賀御番所

覚

一下田ハ湊口よろしからざるに付、風波之節難乗入或ハ舟破損におよひ、其上乗おとしの舟も多く、旁諸廻船之者共難儀仕候由相聞候に付、御吟味之上浦賀湊に御番所被 仰付候事、

一諸廻船之儀ハ、米穀を始其外炭・薪・材木等無滞留運送候様に被 仰出義候間、向後植木・庭石・其外遊道具之類、積廻し不申筈に候条、此旨舟持共、可申付候事、

右御番所替り候に付、判鑑等引替、其外之儀に付而も浦賀奉行江可開合候事、

以上、

子十二月

今度從

公儀如斯御書付相渡候、御領下船持共、此趣堅相守候様ニ念入可申付候也、

彦之丞 役印
丑正月三日
頼母

享保六年也

町年寄共
大庄屋共

〔No. 28〕博奕・三笠附^并永代橋之儀書付

覺

一此度町中博奕・三笠附堅御停止^二被^レ仰付候付、比日^三至御当地湊中^二懸^リ居候諸廻船^レ參、右之族猥^二仕候段被^レ爲聞召及不届候段被^レ仰渡候、依之向後右廻船中^レ御目付を以御吟味可被遊旨問屋共^二急度被仰渡候、此上博奕仕候舟頭・水主族有之者其船^并積荷物共^二

御公儀様被召上、舟頭・水主ハ不及申、其船引請之間屋迄曲事^三可被仰付候旨被^レ仰渡候、尤問屋共方^レ吟味仕訴出候者ハ過急御免可被遊旨、被仰渡候御事、

一永代橋近年町橋罷成候付、廻船之者共疎略^二存、往來之船乘当損或ハ橋杭^三船なと^レなき候段、被^レ爲聞召及不届之

仕方^二候、向後右之橋^レ廻船乗当候か、又ハ舟つなき候族有之ハ、御見届之上損候所相弁させ、其上廻船之者共如何様^二も可被仰付旨、是又問屋共^レ諸廻船^レ急度可申渡旨被仰付候御事、

右之趣大岡越前守様、諏訪美濃守様御立会^二而^レ被仰渡候付、惣問屋寄合之上委細承知仕候、自今銘々引請候到着之廻船^レ申渡、尚又諸国船元之所々^レも兼^而申遣、猥無之様^三可仕候、為後日連判仍如件、

享保十一年五月廿九日
惣廻船問屋

連判

△右江戸^レ瀬戸太郎右衛門廻船之者共方^レ申來候由、又五郎申來^レ、爰元廻船之者共^レ重々念入申聞候様^二又五郎へ申渡ス、

〔No. 29〕 従 公儀廻船荷物改方御触

一江戸表諸問屋^江上方より商売諸荷物廻船^二而積下候節、難風^三逢、荷物刎捨、其向寄浦方^江乗込候時、其浦之役人立合、荷物改方之儀、只今迄ハ改様色々有之候所、今度諸問屋共願によつて自今ハ其浦之役人立合、船中残^リ荷物引ならし不申、其儘^二而捨小口^江縄張致封印、問屋又者荷主参候内番人附置可申候、右改方之儀、先達而浦々相触候所、右之通^二相成、障候儀無之旨^三候間、自今書面之通浦方一統之改^二可被申付候、以上、

酉八月

右之通去々酉年品川より遠州今切までハ相触候、其節今切より大坂迄ハ触無之^二付、此度今切より大坂迄も相触候間、此旨心得候様^二可被申付候、以上、

亥七月

右之趣可被相触之候、

別紙

藤堂^{（高治）}大学頭領分

伊勢国

藤原浦

矢野

雲出

阿漕浦

阿濃野浦

へた^{（部田）}

町家

今度従 公儀如別紙御書付出候^二付、写相廻候、御書付之趣念入可申渡也、

六兵衛

亥七月廿九日

佐右衛門

役印

伊藤又五郎

橋爪源藏

間宮善左衛門

川北清右衛門

倉田半左衛門

右月番宅^江伊藤又五郎・川北清右衛門呼寄、御書付^ニ無之浦方茂有之候ハ、其支配之大庄屋^ハ入念申渡候様^ニ申付^ル、

〔No. 30〕 菖蒲甲・鍵・長刀^{〔箔〕}はく御書付

覚

一 菖蒲かふと立物計はく置可申事、

一 鉢^{〔鉢〕}・しろ何もすみぬりに可仕候、紋^{〔描〕}ゑかき候ハ、たん^{〔丹〕}・こふん^{〔胡粉〕}・ろくしやう^{〔緑青〕}ニて少々粉色可申事、

但織物類ニて包申間敷事、

一 鍵・長刀はく置申間敷候、其外ぬり彩色かふと同様之事、但人形類可為無用事、

右献上之菖蒲甲たりといふとも、此定より宜敷仕間敷候、是より亀相なるハ只今迄用ひ来候通たるへく候、以上、

丑四月

右之通先達^而町奉行^ハ申渡候間、此通可被相心得候、当年之儀ハ町方より願之品も有之拵置候分ハ商売仕管候、詔候とてハ一切定之外^ニハ不成候、尤来年よりハ相触候通、急度相守可申候、

今度從 公儀相渡候御書付写遣候、町中相触急度相守可申也、

彦之丞

丑五月朔日

役印

頼母

享保六也

宛如每

△郷中へも右同断、

〔No.31〕箔・梨子地・蒔絵御停止御書付

覚

一破魔弓 金銀之箔^并かな物無用、たん・ろくしやうにて彩色可申候、惣躰菖蒲甲可准事、

一羽子板 飾に用候大^并成羽子板^并はね、自今可為停止、常用ひ候羽子板にいたし、尤結構^二仕間敷事、

一雛 八寸^上可為無用、近年結構成ひいな段々有之候間、次第^ヲ追^而かろく可仕事、

一諸道具 梨子地ハ勿論、蒔絵無用に可仕候、上之道具たりとも墨塗に可仕候、金銀之かな物可為無用事、

一子共とて遊びに致し候人形、八寸^上ハ仕出し申間敷候、惣^而翫ひの作^リ物の類、自今金銀之彩色金入^并純子等之衣装、又ハ人形類台^二載候義、一ツ之載候ハ格別、二ツ^上のせ候作り物無用^二いたし、都^而結構に仕間敷候、

右之通来寅正月^上急度可相心得候、有来^リ候作り物之類、当年中商売之儀ハ勝手次第可仕候、来年^上ハ有合候とても、

右之品々商売致し候義可為停止事、

右之通先達^而町奉行^上申渡候、左候へハ、来春^上ハ不用訣候間、献上等^二も致間敷候、可被存其趣候、以上、

丑十二月

△右一通^リ添書^而/写候^而町郷中へ、享保六 十二月九日触畢、

〔No.32〕諸秤・千木御書付

諸秤・千木新古^二不限、修復糸付等内々^二拵用候義、堅仕間敷候、此段向々^上可被相触候、已上、

丑四月

右一通^リ添書^二て写遣し、享保六 五月十日町郷中へ申触、

「No.33」諸秤改之儀^ニ付從 公儀御書付出

諸秤之儀古来より守随彦太郎役人相廻^リ相改候處、近年ハ私事之様^ニ心得候哉、諸秤数多致所持候もの茂、秤少々出し見せ、不宜秤ハ隱置或ハ秤所持不致旨を申、改請さる者も有之様に相聞候、前以相触候通、守随方^方役人相廻し改候節、諸秤不隱置不残出し改請候様^ニ可致候、尤紛敷秤ハ取上^ケ候筈^ニ候、此旨急度可相守者也、

右之趣東海道・東山道・北陸道^并丹波・丹後・但馬、都合三十三ヶ国、御料ハ御代官、私領ハ地頭^方可被相触候、右之通可被相触候、

八月

寛保三也

覚

一諸秤改之儀^ニ付、此度從 公儀御書付相渡^リ候付、役人相廻^リ改候節、御書付之趣急度相守候様^ニ町中^中相触可申也、

亥八月廿四日 三郎兵衛

猪之介

(前条上部書込)

△同十一月守随名代^者為秤改東三十三国相廻候間、伝馬之儀無滞可差出旨公儀触出^ル、其旨町郷中^中申付^ル、

秤之儀町郷中^中申触書付

覚

△郷中へも右同文言一通 寛保三亥也

一從 公儀兼^而被仰出候通、守随秤之外ハ一切用ひ申間敷候、秤損^シ候而為直候節ハ、守随手代方^江遣為直可申候、勿

論、糸附等仮初之儀茂手前^ニ而拵用ひ申間敷候事、

一秤之鍾衡相拵候職人共外々々鍾衡詔来候ハ、守随手代津町小谷小兵衛方^ハ其段申届候上、拵遣し可申候事、

右之通町中^ハ可申聞候也、

亥 九月十八日両印

町老共

〔No.34〕葵御紋付着用無用触

山名左内^ト申浪人葵御紋縫等仕衣類^ニ附、其外巧成仕方共^ニ而偽取込候品々有之^ニ付、旧臘死罪罷成候、就夫葵御紋附衣類之事、只今迄心得違候哉、末々之男女等致着用候者も有之候、左様^ニ有之間鋪義^ニ候之間、向後拝領之者之妻子ハ格別、其外ハ一切着用仕間敷候、且又御用之外葵御紋染又ハ縫紋・織物・蒔絵・諸道具等に至迄、附候事自今堅可為無用由町中^ハも相触候之条、此旨も可被存候、

但御三家^并御紋御免之大名^ハ詔候者格別^ニ候、已上、

卯二月

△右写遣添触^ニ町郷中^ハ申付^ル、

享保八^卯

二月廿九日 八右衛門

彦之丞

役印

〔No.35〕用水・井路・郡境山野之儀御書付

覺

一在々用水掛引井路之儀、川中ニ井堰を立、水を引わけ候処、堰之仕方ニより川下之井水令不足にも無構、年前勝手之宜様にのミ仕候故及爭論、或兩類に井口有之場所片類之井口付替候時双方不申合、一方之自由に任せ仕替候故令出訴候類有之候、自今右躰之儀双方致相對、普請仕候節ハ立合無障様に可致候、若滯儀有之歟、又ハ不法之事仕候時ハ其節より十二ヶ月を限於訴之者可有裁斷、右期月過令出訴候ハ、不取上候事、

一郡境・村境山野之論又ハ質田地等之儀、其外奉行所江訴出候事に付、証抛無之非分之儀をも何角申紛し、又証抛有之儀も年経候得ハ、其事を申掠及出訴相手村方之難儀に及せ、其上双方村々困窮之元に成不届候条、向後如斯之筋不可訴出、若此類之事訴出僉儀之上巧之訳相知候におゐてハ、其咎め可申付候事、以上、

辰閏四月

△右一通リ添触して町郷中へ申付ル、

享保九_辰五月七日 四印

町老・大庄屋

惣連名

△右同文言之御触、享保十四西正月出、いまた行届さる所も有之様ニ相聞候故、再御触出候由ニて、江戸方来ル触書写、町郷中へも向後弥急度可相守旨添書、西正月廿九日相触、

〔No.36〕從 公儀相渡候御書付

於在々所々神事・仏事其外不依何事新規之儀堅不可取建候、若無抛子細有之ハ、奉行所又ハ地頭へ相達、可任差図候、仮令有来儀ニ而も、例ニ替たる品不可仕候、

右之趣堅可相守候、若違背之輩有之ハ、其所之名主・年寄等急度可為曲事候、已上、

未十二月

右御書付享保十二^未十二月十八日、町年寄・大庄や共へ口上^ニて申聞、

〔No.37〕地神・経読・盲目・官位・院号・けさ衣御停止

覚

一 (地神・経読・盲目・官位・院号・けさ衣)

御停止之儀、先年被 仰出候処に遠国にてハ猥に成候と相聞^え候間、向後在々所々に至迄猥に無之様^ニ、急度可被申付候、以上、

九月

右之趣可令相触候、

△右写添触^シテ町郷中へ一通ツ、渡ス、

享保十三^申九月十六日也、

〔No.38〕從 公儀出候借金利足減少御書付

元禄年中金銀吹替以来米穀高直^ニ候处、近年下直^ニ相成候、然^ル处借金銀并質物利金ハ前之通^ニ而諸人致難儀候由相聞候、依之元禄十五年午年以来之借金銀者向後利金五分以下たるへし、今暮前々之借金銀ヲ追越手形を致直し借用候も、是又利金同前之事、

一 只今迄元利不相濟分者今度利分減少之不及沙汰候事、

一 右之趣双方相違無之様^ニ急度可相守、此上返済滞候ハ、借^シ元を奉行所へ可相届候、若又右定より利金下さるにおゐてハ借主可訴出事、

一新規之借金銀者尤相对次第たるへし、猥に高利にすへからさる事、

右之趣急度可相守者也、

西十月

△右之御書付江戸より来外並様方御聞合之上、諸事之儀者可被仰付候間、町郷中へ一通り申聞置候様（藤堂高美）と、仁右衛門殿・

年寄中被仰聞故、十一月八日月番宅へ伊藤平四郎・加藤甚右衛門・木下藤左衛門呼寄、書付一通ツ、相渡、町郷中末々并寺社方へも一通り可申聞候、委細之儀ハ江戸表御聞合有之条、追而可申付旨申聞ス、尤川北清右衛門忌中故、津詰藤左衛門へ申聞ス、

△毎度ケ様之類添書有之候へ共、追而委細申聞候節添書を以申付答故、此度不充添書、

〔No. 39〕右「付江戸表御聞合相済諸借金利息之儀被 仰出帳面

横帳也

此度從 公儀出候御書付ニ准シ、諸借金利息減少之覺

一是迄御借金之利金、他所・御領下とも当暮利金五分ニ可被下候、年賦ニ御定有之分ハ年賦之内五分之利金ニ可被下候事、

附、是迄御家中一統并御懇意之者江対人別思召之上、役人共江被 仰付金子致才覺借渡有之候、利付之分、何茂御借金之差別ニ可准候、其外御領下町郷中并呉服所・菱屋此類江、役人聞届之上金子致才覺借渡有之分、右ニ可准事、

一例年利金無滞被下元居成之御借金、是又向後利金五分可被下候事、

一当酉暮新御借上金、他所・御領下共是迄之利金之格ニ老割以下之利足ニ可申談事、

一御一家様方御間柄へ役人方口入金、是又御借リ金之格ニ可准事、

一郷中へ奉行之切印借金之利金は迄之分利金五分ニ差引可致候、当暮新借リ金之利、随分下利ニ可申談事、

一御家中物成借シ并枝借リ金共利金五分ニ差引可致候、去暮証文之通、当暮之物成・質物ニ而候へ者壳払、去暮借リ之金

子元利の方へ引取、当暮新借シ金之儀者来暮之物成・質物ニ書入候事ニ候へ者、質物も改リ借シ金茂改リ新規之儀候故、利金前々之格相對下利ニ可申談候、分一金之儀者金口入之世話料ニ而利金之外ニ候へ者、是迄之格ニ請取候様ニ可致候、附リ、是迄物成借シ之移リより年賦金など借り有之面々も可有之候、是者利金五分以上之分ハ自今年賦之内者利金五分ニ差引可致候、五分以下之儀者其沙汰ニ不及候、

一是迄物成質ニ借シ来候金子当暮新借シ之儀、金主共方断リ申出候儀、堅致間鋪候、從 公儀出候御書付之趣可相守之処、却而差支かましき事申出候輩ハ、品ニより急度可申付候、

一諸借金利足之儀、中途ニ借リ月割之心ニ而下利ニ相極メ有之分、何も一ヶ年五分之利金十二ヶ月之割ニ、月割ニ差引可致候、御家中物成借り・枝借り共右ニ可准候、

一御領下・町郷中之諸借金共利金

公儀御書付之趣を堅相守可申候、大概致方之小割ハ 御家御借リ金又ハ御家中物成借リ・奉行切印借リ等之利足差引之差別申付候格ニ准シ可申候、右之小割ニ洩候類有之下ニ而了簡難究義者、其訳委細ニ可申出事、

△右之通被 仰出付、町郷中へ添書を以申付ル、

先達而相渡置候從 公儀出候御書付之趣ニ付、此度如斯被 仰出候間、町郷中相触、急度相守可申也、

享保十四 兵助

西十一月廿五日 役印 助之進

町老 宛
大庄や

〔No.40〕借金銀買掛等出入御取上ケ之事

金銀出入之儀於奉行所不取上段、去ル亥年相触候得共、近来金銀通用相滞候由相聞候ニ付、当西正月方之借金銀買懸リ等出入之儀、如前々取上裁許可仕旨、三奉行へ被 仰出候間、被得其意より可被相達候、

十二月

右写遣添書して、享保十四西十二月廿四日町郷中へ申触畢、

兵助 助之進

〔No.41〕借金銀売掛等出入之儀 公儀御書付

覚

一 借金銀売掛等之出入者人々相對之事故、近年老ケ年兩度之裁許ニ申付候得共、向後三年以前子ノ正月々之金銀出入ハ、前々之通取上ケ裁許可申付候、四年以前亥ノ正月迄之金銀出入、只今迄奉行所ニ而老ケ年兩度之裁許に日切申付候分共、向後奉行所ニ而者不申付候間、相對を以無滯急度可相濟候、

一 只今迄金銀出入ニ付奉行所呼出し候節令不參、又ハ濟方申付候得共、金子不差出輩有之由相聞（不埒ニ候、右之通此度相改リ候上、奉行所呼出し候節致不參候歟、又ハ濟方申付候而も不埒之輩有之者、武士方ハ奉行所老中へ申達候筈ニ候、寺社・在町方ハ奉行所ニ而急度咎可申付候、右之趣可被相触候、

寅三月

△右写遣御書付之趣可相守旨、延享三寅四月十二日、町郷中へ申付ル、

伝兵衛

三郎兵衛

〔No.42〕奉公人給金引下御書付

近年八木下直候處、諸奉公人給金ハ前々之通無替儀高直ニ候間、給金引下ケ候様旧冬町触在之候、奉公人召抱候ハ、

右之趣相心得候様向々、可被相達候、以上、

戌二月

今度從 公儀如此之御書付相渡候付写遣候、町郷中相触御書付之趣可相守也、

兵助

戌二月十七日

享保十五也

佐右衛門

町老三人・大庄や十人連名

〔No.43〕書物之儀ニ付御書付

病薬を委細記候普救類方と申書物十二冊、今度板行被 仰付候、代銀ハ一部ニ付九匁八分ツ、書物問屋并小売之者も同直段ニ売候筈候間、望之面々為可被調相達候事、

二月

今度於江戸病薬書物之儀ニ付、從 公儀如此之御書付相渡候付写遣候、町郷中、相触、望之者有之候ハ、調候様ニ可致也、

兵介

戌二月廿九日

役印

享保十五也

佐右衛門

町郷一通ツ、

〔No.44〕東医宝鑑直段引下御書付

東医宝鑑と申医書廿五冊、先年板行被 仰付候、此度直段引下ク、上本一部ニ付七十八匁、次本一部ニ付六十匁ニ売渡候筈ニ候間、望之面々為可被相調相達候事、

△今度医書直段引下ク之儀ニ付從

公儀出候御書付写遣候間、町郷中可触知也、

兵介

戊四月十四日

役印

佐右衛門

町郷

一通宛

〔No.45〕於御代官所惡党者在之刻加勢之儀從 公儀出候御書付

領分近辺ニ御料有之面々、於御代官所若惡党者等有之人数茂入可申節、当地へ申越及延引候時分、少々之儀ハ直ニ御代官方可申達候間、相応ニ人数可被差越候、為心得申達置候、右之趣万石以上之面々へ可被達候、

八月

此度從 公儀相渡_リ候御書付之写遣し候、郷中へ相触、御書付之趣兼_而相守可申也、

寅九月十一日 両役印

享保十九也

大庄屋共九人宛

〔No.46〕諸国百姓共勘定相濟候印形之儀從 公儀渡候御書付

一諸国村々大小之百姓共年貢_并諸役懸_リ物、或村入用等に至迄、毎年名主・組頭念入帳面ニしるし、惣百姓立会勘定無相違におゐてハ、銘々印形取置可申、尤名主・組頭も右帳面ニ奥判可仕事、

一右者定_リたる事たりといへとも、端々ニハ年来之仕くせを以て、毎年勘定帳面惣百姓印形をも不取置、出入に及び候儀間々有之候条、自今以後此旨急度可相守事、

右之趣知行村々へ可相触候、若此以後出入ニ及び候節、遂吟味件之触書不致承知村方有之者、地頭可為越度候、以上、

申九月 元文五也

右之通相触候間、為心得相達候、

△ 覺

此度從 公儀被 仰出候御書付之写一通遣之候間、此旨末々之者迄念入触聞、堅可相守由人別印形取置、其段町役人共証文可差出候、惣印形之儀前々申渡候通、弥念入可申也、

九月廿三日 両役印

町老三入

△此度從 公儀被 仰出候御書付之写御ふれ之趣とも末々之者共迄念入申渡、印形取置申候、是迄も毎度被 仰付候通、年貢并諸役掛物・町小入用等至迄毎年帳面しるし、末々迄立合無相違得心之趣印形取置、猶又念入立会得心之印形年々取置可申候、已上、

右之通前書仕、町年寄共支配限一帳、町々役人共印形為致可差出候、已上、
△郷中も右同文言之書付二通相添申渡、但末々ト有之所、惣百姓ト書之、町老大庄やト替ル、

〔No.47〕取退無尽之儀從 公儀御触

取退無尽^与号し、三笠博奕同然之儀在之由相聞候付、停止之旨前々相触候所、今以不相止、近比者寺社建立講又者品々之講と名付、取退無尽致候付、右当人共相頭候分ハ召捕、此度御仕置申付候、向後右艱之儀在之候ハ、武士方・寺社方・在方共遂吟味、当人ハ不及申地主・家主・五人組・名主・一町内之者共迄、三笠博奕同然答可申付候条、常々心懸致吟味、疑鋪者於有之者早々可訴出候、已上、

西四月

△右写遣、末々迄急度相守候様、寛保元酉五月八日、町郷中へ申渡畢、

〔No.48〕諸国寺社勸化之儀ニ付御書付

諸国寺社修覆為助力勸化 御免之上、寺社奉行連印之勸化状持參、御領・私領・寺社領在町致巡行候寺社之輩へ、只今迄村方より勸化停止之旨地頭へ申渡有之候間、難成勸化由断申所々も候段相聞候、私之勸化相留候儀者領主心次第候、從 公儀御免之上諸国巡行之事候条、寺社奉行連印之勸化状持參之寺社之輩へ、志次第可致勸化旨、御領へ御代官、私領へ領主・地頭へ兼可申聽置候、右之通可相触候、

△右可相守旨、例之通添書して、寛保二^戊年四月廿九日、町郷中へ申渡、

〔No.49〕諸国ニ絞^ニり油之儀ニ付御書付

国々より菜種大坂表へ積廻し来候処、近年不作故歟、大坂へ積廻し候菜種無數成候ニ付、水油高直ニ^ニ而諸人之難儀ニ在之候間、国々ニ^ニ而菜たね作り増し、大坂表へ積廻し可申候、

一絞^ニり油致し候国々之内、江州・尾州・勢州・三州・駿州・豆州・相州より江戸廻し致し来候分へ、只今迄之通可積廻、摂州・兵庫・西ノ宮^并・紀州・中国筋・四国筋^ニ・西国筋^ニ而絞^ニり候油、江戸表へ不致直積廻、大坂へ積登^せ可令売買候、右之趣御料者御代官、私領へ地頭より可触知者也、

二月

△右添触ノ写遣、寛保三^亥三月七日、町郷中へ相触、

〔No. 50〕古分銅之儀^三付從 公儀之御書付

△松平左近將監殿御渡之由、大御目付中^{〔乗色〕}より御順達御書付之写

金銀掛合候分銅、寛文年中改已前之古分銅、兩替仲間^ニ而遣候由相聞候^ニ付、京・大坂・堺近郷之分潰等迄外^ニ而売買不致、潰直段を以後藤四郎兵衛方^{〔延興〕}へ買うけさせ、目輕^キ古分銅内々^ニ而売買致間數旨度々相触候處、今以西国并長崎^ニ而ハ古キ分銅多ク売買いたし用候由相聞候、此以後内々^ニ而売買致候義者勿論不隱置四郎兵衛方^{〔延興〕}へ可相渡候、尤四郎兵衛方^{〔延興〕}分銅改役人相廻り、紛數分銅ハ取上^ケ候筈候、其趣急度可相守者也、右之通御料ハ御代官、私領ハ地頭より可被相触候、

亥六月

右之通可被相触候、

△右添触 うつし遣し、御書付之趣相守候様^ニ、寛保三^亥六月廿日、町郷中^{〔延興〕}へ申渡、

三郎兵衛
猪之介 印

〔No. 51〕分銅改之儀町郷中^{〔延興〕}へ申渡

御書付之写

一分銅^{〔木葉〕}外之物を打込致添物染塗^{〔木葉〕}こくそ并無判似^{〔木葉〕}分銅、手代相廻し取上申候、尤四郎兵衛方^{〔延興〕}兩替屋持參仕候而も、

此類^ニ而疑數分銅ハ取上申候、

一分銅正真^ニ而も數不足通用之訳難相立分銅ハ、潰^シ直段を以四郎兵衛方^{〔延興〕}へ買請申候、

右書付を以御頭^{〔延興〕}御支配方^{〔延興〕}御窺被成候處、伺之通相濟、古来^{〔延興〕}定法之通相改可申旨被 仰付候、

亥十月

覚

一馬一疋

右ハ今度後藤四郎兵衛名代之者、分銅改として近江・伊賀・伊勢・志摩国相廻候ニ付、右四ヶ国江戸方往来幾度茂書面之伝馬無滞可差出者也、

卯三月 弥惣太印 荒四印

※ 孫七印 無出印 河内

出羽印 若狭印

志摩印

近江 伊賀 国

伊勢 志摩

御料

私領

寺社領

宿々村々

問や・年寄

(※部書込)

△添触町郷中へ一通ッ、

覚

此度分銅為改

後藤四郎兵衛手代

相廻候旨江戸方申来候、右書付写一通并御伝馬御証文之写一通遣之候、右書付之趣相心得候様、御領下町郷中へ可相触

候也、

卯四月十八日 兩人役印

延享四也

〔No.52〕潰銀売買之儀并櫛・筭類花麗^ニ相成候儀 公儀御書付

寛保三年也

櫛・筭^{并銀^{金貨}}がなく類用候儀停止候旨、先達^而相触候上ハ、右銀具之類潰^ニ銀^ニ相成候^ニ付、不貯置銀座^ハ売渡可申候、惣^而灰吹銀并潰^ニ銀^ニ前々より内々^而自由^ニ売買可致筋^ニ無之候、潰^ニ銀^ハ銀座^ハ買入候事^ニ候処、近来ハ心得違猥^ニ成候様^ニ相聞^ハ候、古来之通銀座之外他所^ニ而^ニ売買之儀堅令停止候、銀道具・下銀入用之ものハ銀座^ニ而^ニ可買請候、此旨急度可相守者也、

右之趣可被相触候、

亥
九月

五月廿八日江戸町中^ハ御触之趣

女之櫛・筭^ニ金銀之かなもの・蒔絵類結構成仕方可為無用旨先年相触候処、近年櫛・筭^ニ大形成時花詠候者茂有之、鼈甲之善惡を令吟味、上方筋別^而拵価高直^ニ売出^シ、或者金銀之かな物高蒔絵等致、其上前々ハ無之^ハかんざし櫛押^ハ坏と名付拵出^シ令^ニ売買旨相聞^ハ不届^ニ候、向後者櫛・筭古^ヘ之小形を可用候、其外之品ハ堅^ク令停止候間、不可拵出候、勿論有合候分も不可売出候、此已後美麗^ニあつら^ヘ候者有之者、奉行所^ハ可訴出候、其旨堅可相守事、

△今度從 公儀相渡候御書付之写一通遣之候、且又先達^而江戸町方^ハ御触之趣茂写一通相添遣候条、御書付之趣相

守候様^ニ御領下^町中^ハ可相触也、
郷

三郎兵衛
亥十月廿三日

猪之介

印

町郷一通ツ、

〔No.53〕部屋子^并覆面・頭巾之儀從 公儀御書付

近年武士屋敷輕^キ奉公人之部屋子と申、傍輩^ニ而無之者^ヲ差置候、其内^ニ者外屋敷取逃欠落いたし候もの又ハ奉行所方尋之者も有之、右躰之もの部屋^ノ〱^ニ罷有、伝奕等^等もいたし候旨相聞候間、向後武士方上屋敷・下屋鋪部屋〱^ノ遂吟味、不召抱もの者一切差置申間敷候、

一近年面躰を隠し候頭巾を拵、途中にてかふり候者数多有之、奉行所方尋之者^ニ紛敷候間、前々有来候丸頭巾・角^ミ頭巾之外一切かふり申間敷候、
右之通可被相触候、

亥十月

今度從 公儀相渡候御書付之写遣之候、為心得御領下郷中^ノ可触知也、

亥十一月十六日 三郎兵衛

印

寛保三也 いの介

町郷へ它通ツ、

〔No.54〕諸国御巡見^ニ付從 公儀相渡候御書付町郷中^江相触

覚

一今度国々御料所村々巡見被指遣候^ニ付、右之面々相通候、道筋掃除^并道橋一切作^リ申間敷候、馳走として送迎之者

出候儀可為無用事、

一右之面々 御朱印員数之外人馬入候ハ、所定之駄賃錢有之者其定之通、定無之處者近辺御定之割合を以、駄賃錢取之人馬可出候事、

一巡見通候道筋ニ而も百姓農業之儀少も無遠慮いとなみ候様可被申付事、

一私領村々ニ若巡見旅宿候ハ、少々之小屋かけ取繕ハ不申及畳替可為無用、古く候而も不苦候、賄道具等も有合候を借し可申事、

一旅宿可成家一村ニ三軒、無之所ハ寺又ハ村を隔候而成とも不苦事、

一泊・昼休之場所ニ而入用之飯米・味噌・薪・酒肴・油・野菜等ハ、其所之相場次第売候様ニ可被申付事、

一其所ニ無之商売物脇より出置売^セ申間敷候、衣類・諸道具者勿論、酒肴ニ而も持寄売候儀堅可為停止事、

一右之面々金銀米錢・衣類・道具ハ不^レ及申、酒肴・菓子等迄一切受用無之筈候間、内々ニ而も堅音信不仕候様ニ知行所之者共ハ可被申付候、若内々ニ而音信仕旨相聞るにおゐてハ可為曲事候間、其旨急度可被申付事、

一何方見分仕候共、私領方よりの音信等も一切受用無之筈候間、音物ハ不^レ及申、使者・飛脚差出候儀茂堅可為無用事、

一右之面々家来下々迄在々ニおいて、衣類・道具等ハ買不^レ申様ニ申渡候之間、得其意商売不仕候様ニ可被申付事、

一野道之馳走として新規茶屋等作り候儀堅可為無用事、

右ハ今度御料所国々ニ巡見被指遣候ニ付、往来之道筋ハ私領村々をも可罷通候間、書面之条々、先達^而地頭方領知村々^江申触、無相違様ニ急度可被申付候、以上、

丑閏十二月

今度諸国御巡見ニ付、從 公儀出候御書付写一通遣候、町中^ハも可相触也、

寅 正月六日 兩人役印

町一通

郷へ一通

延享三也

△尤御巡見^ニ付御書付三通出候へ共、町郷中へハ右ノ内一通迄相触候也、

〔No. 55〕道中^并船積之儀従 公儀渡候御書付三通町郷中^江申触

△宿々御掟書一通、

△旅人定^ヲ破^リ候ハ、可訴出御書付一通、

△舟積載置之外ハ植木・庭石等迄通船候儀一通、

右三通委細別帳^ニ有之、長^キ事故略爰、

△添触町郷中へ一通ツ、

此度従 公儀之御触書三通、別紙^ニ写相渡候条、町郷中へ触知^セ、御書付之通急度相守可申也、

伝兵衛

卯三月廿八日

役印

三郎兵衛

延享四也

宛所如例

〔No. 56〕京都吉田家方申来候書付

覚

一 勸請年記慥成社、若年記不相知者慥^ニ古来勸請之社、
一 延喜式内外式外

御朱印所或在所之産神^ニ産子在之尊敬社、

一城之鎮守者古來之御鎮座^ニ而社家附來産子在之社、

一所之産神^ニ而産子持之社者社家筋目之者取立可相願候、自然社家難取立候ハ、其近所之社家兼帶相頼、神事・祭礼取行、尤神位記有之社家を以可奉納候、

一産子無之社も社家有來社領・除地等^ニ而茂有之、其御領主以下格別崇敬社、

一別当社僧或ハ修驗等奉仕之社、右神位記以社職可奉納候、

一古証文・縁起・棟札等於有之ハ可持參候、

一添狀之義 御府内ハ寺社御奉行所、御料ハ御代官所、私領ハ其御領主方被仰聞被下、社家頭有之所ハ其頭方も猶令吟味、書狀可相添候、

一官金七拾兩可為用意候、此趣^ニ候ハ、可及披露候、乍然天氣之儀ハ難計候間、此段も相心得可申候、

此外寺之鎮主・居屋敷之鎮守・靈社・新社^并社僧持^ニ而社僧致減罪候社^ニハ難成候、

右神位御願申上輩、此ヶ条之趣相心得候様^ニ御領内之者被仰聞可被下候、已上、

九月朔日

△右之書付吉田家司中^方添狀^ノ来^ル、

〔No.57〕右^ニ付町郷中・寺社・修驗^ハ觸聞^ス、

此度吉田家方諸社神位之儀^ニ付書付相渡^リ候故写遣候、自今神位願人有之候者其委細可申出候、吟味之上京都^へ

之添狀可遣候、御領下^町郷中・寺社方^并修驗等^へも、右之趣書付之通可相觸也、

子 三郎兵衛
十月廿七日
猪之介 役印
延享元也

町郷へ一通ッ、